



Title	〈小人書林迷走録〉第2回 連環画定期刊行物あれこれ : 絵のある雑誌に迷いたい！
Author(s)	武田, 雅哉
Citation	連環画研究, 1, 105-111
Issue Date	2012-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98383
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98383
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_1_105-111.pdf



『連環画研究』第1号 2012年3月

〈小人書林迷走録〉第2回

連環画定期刊行物あれこれ

——絵のある雑誌に迷いたい！

武田 雅哉

連環画は、単行本もさることながら、雑誌に掲載されたものも、なかなかおもしろく、かつ研究の上では重要である。形態上の制限から、短いものや、長編の一部抜粋が多くなるが、時代の動向を把握するには、やはり雑誌を見なければならない。そこで、連環画の専門誌、あるいは研究誌について、手もとにあるものにかぎるが、この場を借りて、すこし紹介してみよう。

『連環画報』

連環画の雑誌といえば、第一にこの『連環画報』を挙げなければならないが、連環画というジャンルを離れても、中国のあらゆる長命雑誌は、この国の政治的変動とともにあり、いずれをとっても、たいへんにおもしろい資料となっている。

1951年5月（実際には6月）刊行の創刊号から、1960年の停刊（総219期）までは半月刊であった。1973年の7月に「試刊」号（これは総期数にはカウントされていない）が出され、10月には「復刊号」（総220期）が刊行、以降、現在にいたるまで月刊となっている（ただし、1976年の10・11月、および1977年の1、2月は合刊。それぞれ総期数の2期ぶんとしてカウントされている）。ちなみに2011年12月号で、創刊以来の『連環画報』は総678期を数えている。そのあいだ、雑誌の版形は、以下のようにしばしば変更されていた。



1951年第1期（創刊号）～1954年第12期（総74期）は20開本（178×210）

1954年第13期（総75期）～1958年第6期（総164期）は12開本（248×260）

1958年第7期（総165期）～1959年第6期（総188期）は大16開本（205×260）

1959年第7期（総189期）～1960年第13期（総219期）は12開本

1973年試刊・復刊（総220期）～1998年第12期（総522期）は16開本

1999年第1期（総523期）以降、現在にいたるまで大16開本（210×285）

最初は人民美術出版社の刊行であったが、1999年からは、後述する『中国連環画』（中国連環画出版社）と合併し、中国美術出版社による新生『連環画報』が誕生した。

最近、『連環画報』創刊六十周年を記念して、創刊号から文革前までの『連環画報』影印本219冊が刊行された（『連環画報影印本』1～8。人民美術出版社・連環画出版社・『連環画報』編集部/出版、2011）。画像には多少のにじみやピンボケがあり、折り込み図版など、本来の形態の完全な復元ではない部分もあるが、当時の様子を理解するには十分なものである。連環画研究のための快挙といえるだろう。これを機会に、各大学の図書館では、ぜひ揃えておくべきだ。

上海の多倫路には、知る人ぞ知る文革グッズ屋さんがある。ご主人は若い時分から古雑誌や古新聞などの、要するに「紙くず」を拾い集める習性があるって、奥さんはそれにつきあわされ、いろいろ苦勞もしたらしい。そんなむかしばなしが、中国のテレビでも紹介されていた。ぼくがその店で奥さんと雑談したときには、

「ウチの人はまったくゴミ集めが好きでねえ」と、ニコニコしながら話していた。ぼくは、中国旅行の際には、カバンに紅領巾を巻き付けておくのだが、その時も、奥さんはすばやくそれを見つけて「あらま、紅領巾！」と笑った。

店には古雑誌も置いてあるのだが、あるときここで、5・60年代の『連環画報』の山を見つけた。完全な揃いではない。値札を見ると「? 万元」とあった。日本円にしたら「? 十万」じゃないの！ぼくはすぐさま店の主人を呼んで、言った。「お金をおろして、明日またくるから、ヨロシク！」——その夜。こうして堅く約束を交わしたのにもかかわらず、『連環画報』をあっさり別の客に売っぱらって笑っている、憎むべき背徳者の店主の夢を、ぼくはなんども見ては、うなされたのであった。



翌日、ほとんどわが全財産に近い人民元でパンパンになったカバンを抱えて、ぼくは興奮を抑えながら、店に行った。やはりかれは背徳者などではなく、神のごとく優しい笑顔でぼくを迎えてくれて、「?万元」の人民幣の束を受け取ると、その神々しいかんばせは、さらに輝きを増した。ぼくは、『連環画報』を詰め込んだ買い物袋を抱え、ふらふらながら店の前でタクシーを捕まえると、そのまま日本に郵送すべく、郵便局に直行したものである。

ウシシシと日本に帰ったぼくは、帰宅してから、パソコンのメールを開いた。すると、嗚呼、なんということであろう！ある古書肆から、『連環画報』の古いのがセットで入りましたが、どうします？」という、悪魔の囁きのごとき連絡が入っていたのである。ぼくも人の子、10秒ほど心千々に乱れたが、もちろんこれも買っちゃったわけである。値段は、ほぼ同じであった。

かくしてぼくの書架には、古い『連環画報』が二セットならんでいる。手に取って読もうとすると、ぱらぱらと紙が粉のように崩壊していく。それでもなんとか、国宝に触るようにして欠号をチェックすると、おおよそ八割がダブっていたが、それでも、どうしても見たい号が片方だけにあったりして、「本は躊躇せず買うべし！」という確信をさらに強めたしだいであった。原本を粉末にすることなく、中味を読むためにも、今回の影印本の刊行は、じつに慶賀の至りなのである。

『工農兵画報』 / 『富春江画報』

名前からして社会主義的な『工農兵画報』は、文革テイストが濃厚な連環画、宣伝画の宝庫である。杭州の浙江工農兵画報社による編輯。同名の刊行物は複数あるが、ここでの『工農兵画報』（旬刊）が発刊されたのは、1967年6月で、初期のものの表紙は赤と黒の2色刷り。毎号8頁で、横長の版形を採用している（183×264）。1970年第19期（総第107期）



から表紙がカラーとなり、全12頁になる。69年9月下旬号（総第79期）に挟まれていた『『工農兵画報』拡大訂戸的通知』によれば、「『工農兵画報』は省革命委員会政工組の直接の指導のもとにある政治宣伝刊行物」である。目的はすべてこれ毛沢東思想の

宣伝にある由。1972年第1期（総第161期）から半月刊に変更され、全16頁になる。文革期を読みとくための連環画雑誌といったら、なにをおいてもこの『工農兵画報』が一押しである。

『連環画報』休刊中も元気に生き抜いていた雑誌だけに、その活躍ぶりは、なかなか勇ましいのである。

『工農兵画報』は1978年第1期（総第299期）から月刊となり、サイズも16開（B5）に変更され、頁数は36に。内容も、手のひらをひっくり返したように「四人組批判」「華国鋒政権の擁護」などが主流となるが、これまた当時のすべての刊行物に共通する趨勢であった。

さらに1981年第1期（総第335期）からは『富春江画報』と改名された。富春江とは、浙江省を流れる河の名である。表紙に「富春江」のローマ字表記をとって「FCJ」などと気取ったタイトルがデザインされているのも、80年代初期の空気を伝えているような気がする。改名後は、西洋美術の紹介に力を入れ、表紙は基本的に中国人による絵だが、裏表紙は西洋絵画の紹介にあてている。掲載作品も西洋のモダニズムの影響を受けたものが増えていったが、このような傾向は、従来の連環画を好んできた読者の反発をも招いた。

1987年第11期の第2頁には、「貴誌はしだいに往年の魅力を失っていった」として、購読をやめるという読者の手紙を掲載している。それと同時に「批判、建議を歓迎する」という編集部の意向も伝えている。これはそのまま、80年代末における、伝統的連環画の衰退の反映でもあった。同誌は、1988年12月、文革時期の創刊以来総計430期をもって停刊。その後は『今日生活画刊』なる雑誌に継承されたが、こちらは連環画雑誌ではない、まったく別種の雑誌である。



『中国連環画』

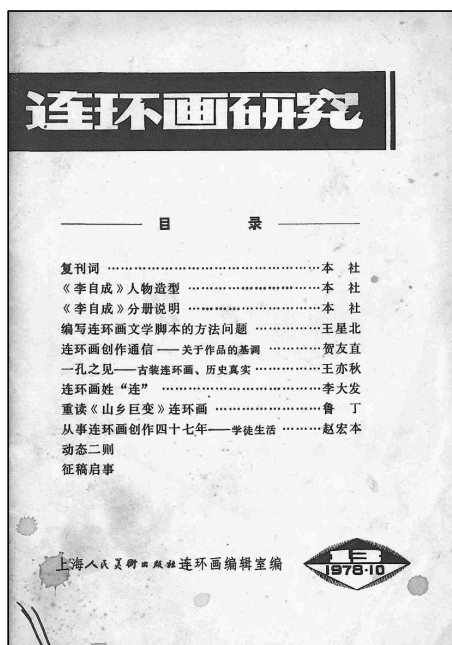
中国連環画出版社（北京）、1986年1月の創刊だが、創刊年のものは架蔵していない。B5版の月刊誌である。1998年まで刊行され、先述のように、1999年からは『連環画報』と合併して新生『連環画報』となった。

1987年当時では、主編は姜維朴、副主編は陳惠冠、費声福、吳兆修。1987年の目次には「当代人」「各地佳作」「系列連環画」「名著選絵」「画刊紹介」「名人軼事」「世像大千」「典故・寓言・伝説」「連環画漫画人物」「外国画廊」「連環画遡源」「編創手記」「老連信箱有問必答」が見えている。



『連環画研究』

次に、研究誌の性格を持った刊行物を見てみよう。1955年の秋、新美術出版社から『連環画研究』が創刊された。これが第3期まで出たところで、新美術は上海人民美術出版社に併呑され、1956年にはつづけて第4期が刊行、1957年までに12期が刊行された（黎魯「憶新美術出版社」『連環画研究』第23期）。ここでひとまず停刊となり、文革終了後の1978年10月から、第13期として復刊される。筆者架蔵のものは、復刊後のものが13期から23期まで。いずれも「上海人民美術出版社連環画編輯室編」となっている。その後の刊行状況は不明。第18期までは、裏表紙に「内部刊物」の四文字が印刷されている。



賀友直「連環画創作通信（通訊）」、王亦秋「一孔之見」、趙宏本「從事連環画創作四十七年」などが連載されている。いずれも絵師たちによる貴重な証言である。

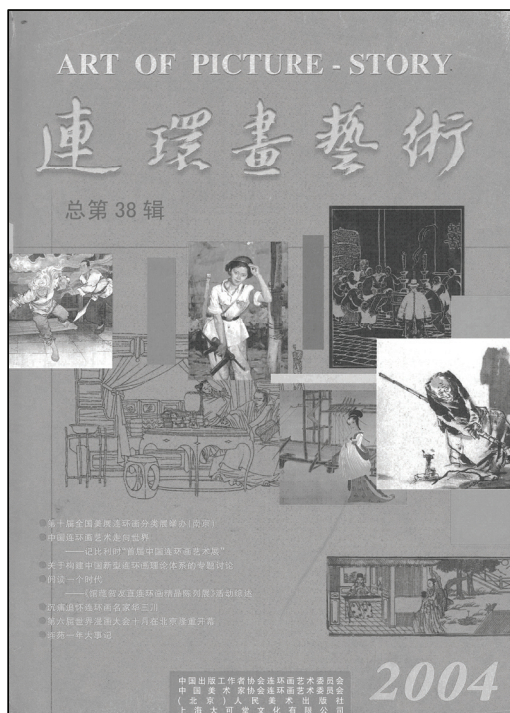
『連環画論叢』 / 『連環画芸術』



人民美術出版社出版、『連環画論叢』編輯組編輯。創刊号は1980年8月に出版される。主編は姜維朴。「中国連環画研究会会刊」と銘打っている。1985年までに10輯が刊行されている。

1987年1月20日、国家出版局の批准を受けて『連環画芸術』(第1輯)と改名する。「中国連環画研究会『連環画芸術』編集部/編輯、中国連環画出版社/出版、新華書店北京發行所/發行」とある。第20輯より「中国出版工作者協会・連環画芸術委員会『連環画芸術』編集部/編輯、中国連環画出版社/出版發行」となる。1996年1月に第34輯刊行後、しばらくの休刊。2000年1月、第35輯から大きな版形(16開)にて復刊した。

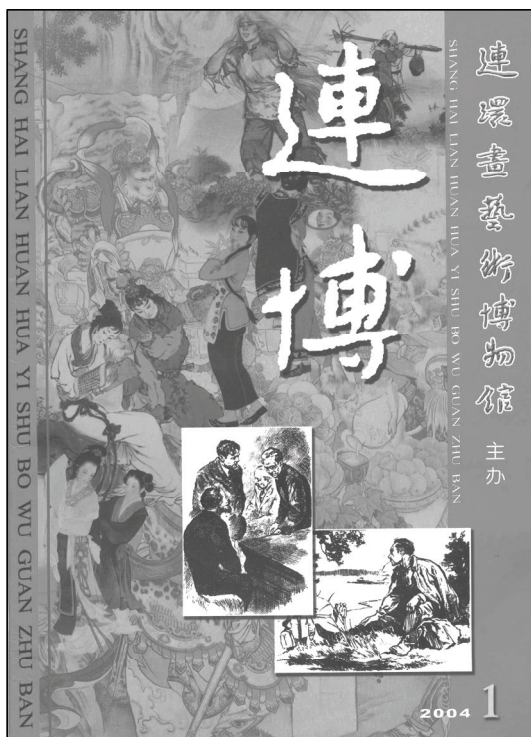
『連環画芸術』編集部/編輯、中国美術出版総社/出版、連環画出版社/發行」となっている。



『連博』

その名が示すように、2002年10月の創刊時には「連環画芸術博物館刊」と銘打っていたが、そのような博物館が実際に存在するかどうか、ぼくは知らない。設立する計画は古くからあるのだが、まだ実現していないようである。いまは「連博画苑」が主催、中国美術協会連環画芸術委員会、中国版協連環画芸術委員会、上海児童博物館連環画芸術展覽館の協辦となっている。大16開本、全56頁。架蔵本は2004年第1期から。

エッセイ、動態、旧作品の再録、出版情報などがその内容だが、資金が潤沢なのであろうか、きれいなカラー頁の多い雑誌である。漫画やアニメの情報にも頁を割いている。



このほか、雑誌形式のものから新聞形式のものまで、数十種の連環画定期刊行物が各地に存在している。それらについては、またの機会にしよう。

